

2009 年度科学研究費基盤研究 C 採択研究  
**「吉岡銅山資料の展示と公開に関わる史料の記録と遺構の調査」**

小西 伸彦  
吉備国際大学、社会学部  
ビジネスコミュニケーション学科

高梁市成羽町で稼動した吉岡銅山の資料は一般に公開されていない。『成羽町史』史料編に掲載されているが、研究者が一次資料に触れる機会はなく、岡山県立図書館や高梁市立図書館にも吉岡銅山に関する資料はほとんど収蔵されていない。また、吉岡銅山そのものが研究対象とされた形跡も少なく、銅山稼業の地となった吹屋にも展示や資料はほとんどない。

本研究では、①吉岡銅山資料、特に近代以降の一次資料のデジタル化を行うこと。②坂本地区で稼動した銅山遺構を調査し、施設跡の確認を行うこと。③改装予定のある吹屋資料館に展示する銅山資料を整備すること。を通じて、吉岡銅山の歴史的再評価の基礎をつくる。

キーワード：産業考古学、近代化遺産、近代化産業遺産

## 1、研究の学術的背景

世界遺産における産業遺産の代表は、産業革命発祥の地であるイギリスのアイアン・ブリッジ渓谷、鉱業集積地として繁栄した「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」、ドイツの「フェルクリンゲン製鉄所」などである。わが国で



1905(明治38)年の吉岡銅山

は、第31回世界遺産委員会で「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産一覧表に記載され、「九州・山口の近代化産業遺産群」と「富岡製糸場」は世界遺産暫リストに加えられている。世界遺産に占める産業遺産の割合は年々増加し、その傾向はわが国でも顕著である。

わが国で産業遺産の研究が本格化したのは、1977(昭和52)年の産業考古学会の発足からである。文化庁は、1990(平成2)年に「近代化遺産総合調査」を開始。都道府県単位での、建造物を中心とした近代の産業遺産悉皆調査に乗り出した。そして、1996(平成8)年に文化財保護法を改正。文化財の登録制度を導入した。近代の産業遺産の保存活用が本格化したのである。経済産業省は、2007(平成19)年度に「近代化産業遺産」の認定を開始。過去2回に渡って、66の産業ストーリーに則った遺産認定を行った。近代の産業遺産を保存・活用する動きは確実に活発化したといえる。

## 2、吉岡銅山

高梁市成羽町吹屋から坂本にかけて操業した吹屋鉱山は、807(大同2)年の開坑説を持つ。室町時代前期に銀山から銅山になったとする説が有力視されているが、その歴史は伝承をつなぎ合わせたものに過ぎない。銅山の名称は、石塔



現在の吉岡銅山跡

から関東、吉岡へと変遷したが、その史料は乏しい。岡山県内の図書館に所蔵される資料は貧弱で、地元で研究者を受け入れることはおよそ不可能である。吹屋の家並みは、鉱業副産物である緑礬と弁柄で築財した弁柄商人が築いたものである。江戸から明治に完成したこの伝統的建造物群保存地区にも、町の発展の祖となった銅山に関する展示はない。

吉岡銅山が近代化を果たすのは、江戸時代に経営権をもった泉屋と、「日本鉱法」が公布された1873(明治6)年に借区を得た三菱商会からである。泉屋は住友の前身。三菱商会は西洋式掘鑿技術やダイナマイトを導入。水力発電による坑内の電化、インクラインやトロック輸送体系の確立などの近代化に着手。明治末期には最盛期を迎えた。1903(明治36)年に竣工した笠神発電所は岡山県下初の水力発電所であり、吉岡銅山専用軌道は岡山県二例の馬車鉄道である。

三菱商会は、その後、長崎県の高島炭鉱や福岡県の筑豊炭田、北海道空知での炭鉱経営に進出。財閥形成に大きく踏み出したが、その基礎が吉岡銅山にあったと言っても過言ではない。また、別子銅山に乗り換えた住友商事が財閥形成に向けて力を付ける契機となったのもまた吉岡銅山での経験があったからである。

わが国の銅山の代表は、足尾、尾去沢、小坂、別子などだが、銅山の近代史上、吉岡の果たした役割は大きい。ところが、研究資料の欠如と、研究者を阻んできた資料公開の閉鎖性が吉岡銅山の研究を阻んできたのである。三菱が吉岡銅山から撤退した1931(昭和6)年は、わが国の銅山が閉山に追い込まれていった時期に重なる。休山以降、銅山施設のほとんどが取り壊されてきた。銅山跡には自然が戻り、操業時の施設特定は困難である。

### 3、研究の学術的背景

『延喜式』には「凡鑄銭年料、銅鉛者備中八百斤毎年繰送」と記述され、備中が古くからの銅生産地であったとしている。成羽町内には、小泉銅山をはじめ多数の鉱山が操業した。岡山県内での銅山の学術調査は、小葉田敦京都大学名誉教授によるもの以外は僅少である。小葉田名誉教授の研究を発展させる為にも、吉岡銅山の研究は需要である。

わが国の財閥形成には、鉱山と金融、両方の経営が必須条件であったといわれる。吉岡銅山は、成羽町内に拠点を置きながら、岡山県一円の銅山を支山として経営した。この多角経営の手法は筑豊と空知でも応用され、三菱の鉱山経営の基礎となった。坂本金弥が吉岡銅山から買収した帯江銅山は藤田組の経営に引き継がれるが、帯江銅山の精錬施設であった犬島精錬所跡は、別子、吉岡と並んで近代化産業遺産の認定を受けた。犬島も吉岡銅山の多角経営の遺産だが、近代化遺産総合調査では顧みられることのなかった吉岡銅山に光が当たった最初でもある。

近代化遺産の報道が増えた今日、産業遺産への関心が高まっている。吉岡銅山に注目する研

研究者も増えてきた。2009(平成21)年の産業考古学会全国大会は岡山県で開催され、吉岡銅山跡が見学会コースに組み入れられた。

以上のことから、吉岡銅山は今後注目される産業遺産であると考えられる。新しい研究者の参入、銅山史以外の切り口からの研究も発展するであろう。

#### 4、本研究の取り組み

研究目的は、吉岡銅山資料のデジタル化を介しての史資料の公開である。産業遺産の研究者が一次資料の閲覧提供ができ、吉岡銅山の歴史的价值が詳らかにされることである。また、市民が高梁に存在した歴史的な鉱山に親しむことのできる環境を整えることである。そのために、以下の内容に取り組んでいる。

- ①『成羽町史』資料編に収録されながら一般公開されていない史資料を中心に、デジタルデータを保存・公開する。
- ②図書館や研究機関でデジタル化した一次資料が閲覧できるようになる。
- ③一次資料を含む造銅山資料を集約するか、その所在を明確にする。
- ④銅山遺構の調査を行い、遺構の施設跡を検証する。
- ⑤吹屋に銅山資料館を再整備し、銅山の歴史が学べる展示を行う。

#### 5、おわりに

史資料の調査を行う過程で、『成羽町史』編纂時のマイクロフィルムデータの存在や門外不出資料の保管場所、財閥系資料の記録の困難さなどが明らかになった。所在場所不明の資料の存在や写真資料の発掘にもつながった。



今後展示場所として整備する吹屋資料館

科学研究費を受けることができるのは平成23年度までである。その間に、まず、高梁市内に保管される資料の記録を行う。町史編纂事業や資料保存に関わってきた研究者との共同作業体制を確立し、優先順位に沿った記録作業を完成する。次に、住友、三菱の資料記録を、高梁市、高梁市教育委員会との共同作業で行う。三菱商會が吉岡銅山以降に経営した長崎と筑豊炭鉱の歴史を知る。国内の銅山跡および銅山資料の展示・公開例を研究する。現存する吉岡銅山遺構の調査を行う。これら三件は、吹屋資料館改修の時の、展示に活かす。

資料類が閲覧や記録できないことも想定される。もともと、企業が所蔵する未公開資料の内容は把握できていない。こうした資料を記録していくには、地道な記録作業の積み重ねが必要である。今後は、着実に作業を積み重ね、実績をつくっていく重要があると確信した。